明日ありと思う心の仇桜

たまたま(pixiv共通)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現パロ風味のデートするヴァイタニャです。

４話予定

春に間に合うといいなぁ

目次

#1 序章 ―― 1

#2 ―― 5

#1　序章

私の記憶にはこの場所には縁も所縁も、同じクラスの女子達がどこで何を買ったなど、そんな会話を気にする事すら無かったと覚えている。

だが今ここに私がいた。そう「原宿」である。駅の改札の目の前には「竹下通り」と書かれた大きなアーチがそびえ立っていた。それはなかなかの存在感を醸し出していた。

私ことターニャ・デグレチャフの出身国、「帝国」より遥か遠い島国へ、副長ヴァイス中尉を伴い秋津州皇国と仕事で赴いていた。既に当初の予定よりも前倒しで仕事が終わっていた為、残りの数日は自由時間となっていた。

「よろしければ視察もかけて、観光でもいかがですか？」と勧められた行き先がここだった。軍資金もいただいて仕舞えば断る術も無い。

「少佐殿。貴女の様な若者には楽しんでいただけると思いますよ。」

これは気を使われたのだろうか。

監視も付かずに2人で出かける事ができるとなれば、少しは浮かれても誰も罪には問うまい。だが、同じ宿舎であるはずのヴァイスとは何故か駅で待ち合わせ。何を考えているのか私にはさっぱり分からない。

「少佐殿。お待たせいたしました。」

「あっ、ああ…。」

少し息を切らしながら目の前に現れたヴァイスは初めて見る私服姿であった。私が言葉に詰まったのは、それに少し驚いてしまっていたからだ。

ヴァイスはTシャツにラフなジャケット。意外とセンスは悪くない。

ちなみに私の服装はと言うと、いつもの如く軍服である。

「少佐殿はそのお姿が1番お似合いになります。」褒めてるんだかよく分からないフォローなのか？をするヴァイス。相変わらず女性の扱いは酷いものだ。まあ、私の服装については置いておこう。

まあ、とりあえず合流はしたのだ、移動をする事にしよう。
信号が青に変わり、横断歩道を2人で並んで渡る。アーチの写真を撮る観光客達をかき分けながらその竹下通りを下っていった。
それなりに幅がある道ではあったが、人が多すぎて移動はこの流れに乗るしかない。背丈の小さい私は人々に埋もれながらもゆっくりとそれに従っていた。
時折、勢いよく向かいから突っ込んでくる者にぶつかりそうになったので、その都度ヴァイスが私を庇っていた。それが何度か繰り返されていつの間にか、私は彼に抱え込まれる様な格好になっていた。
このままでは少し歩き辛い……。だがヴァイスは嬉しそうだし。その手を振りほどく事は諦めた。
すれ違っていく私と同じ様な年頃の女性達はキラキラとした服装と化粧を纏っていた。戦争に身を置く私達とはそれは明らかに世界が違っている豊かで光な溢れるここは、まるで前世の頃の21世紀の日本であるかのような錯覚に私は陥っていた。
帝国には無い煌びやかな色彩と甘い匂いに当てられたのだろうか。私は気がつけば体をヴァイスに抱き抱えられながら何処かの路地で横になっていた。
何故私は寝ているのかと、一瞬現状の記憶と意識がずれている事に気がつき、左右を慌てて見渡すと、ヴァイスの顔が視界に入ってきた。
「少佐殿。大丈夫でしょうか?」
心底心配をしたと言ったその表情と声。
記憶の抜け落ちは95式の使用の際よくある事ではあったが、それは恐怖でしか無い。気を失っていた…。そんな私の側にヴァイスが居てくれた事に無意識にほっと息を吐た。
良く見れば彼のその額には、冷や汗も滲ませている。
「問題ない。」と微笑み返し、失態を見せたと恥じらえば、
「良かったです。」その言葉と共に彼の表情がようやく少し和らいだ気がした。
人混みに酔ったのか貧血をおこしてしまったのか。外交など慣れない仕事に疲れていたのだろうか。思考を巡らせていた私は、

「まだ、横になっていて下さい。」
というそんなヴァイスの言葉が心地良くて、この身を預けていた。
……
「可愛いー!!金髪!軍コス〜!」
確かに少し体は楽になっていた。
が、その甲高い声は私の脳に鋭く刺さり
最悪な気分にふたたび落ちて行く。
「外人さんのコスプレ凄いー!」
その言葉に呼応するかの様にざわざわと私を見てはしゃぎ始める人々。この体はまだスムーズに動かない。対応が遅れているうちに私達はすっかり囲まれてしまっていた。
「お任せ下さい」
「ヴァイス⁉?」
私の苛立つ声にも「問題ありません」
と囲いに歩み寄っていく。
「すみませんが、写真は撮らないで下さい。」
私の身を守る様にヴァイスは手際に良く囲いを解いていく。
「あの人素敵ー。あの子の恋人かなぁ」
ようやく諦めたのか解散し始めた少女達の声に、ヴァイスは耳まで真っ赤になっていた。
……
ああ、私は今まで何をしていたのだ。
この男と私は恋人という関係であった事を思い出したのだ。
どうした。この国と前世を重ねてトリップでもしていたのか?
この原宿へ2人で訪れる事になった時、「デートですね。」と嬉しそうにしていたヴァイスの顔。ああ、そうか。駅での待ち合わせもそういう事なのだ。
私は今日だけでいくつの失態を積み重ねてしまったのか。
ひと仕事終えたヴァイスに、感謝を伝えなければなるまい。
「ヴァイス。ありがとう…助かった。」
「はい。言葉が上手く通じて良かったです。」

照れながら笑っていたが、訪国が決まってからこの国の言葉を勉強をしていたのを私は知っていた。そうだ、勤勉なのもこの男の良いところだ。
「お体は大丈夫ですか？」
「ああ、ヴァイスのおかげですっかりな。…甘い物でも食べにいくか。」
立ち上がりながら、心配性のその頼もしい男の腕に自ら手を伸ばした。
「少佐殿？」
私の行動に少し慌てるヴァイスに
「……ああ、今日はプライベートだ。その、……ターニャでいい。」
その言葉を口にすると、
彼からは「はい！」と勢いのいい返事が聞こえてきた。
私は恥ずかしさのあまり、彼の顔を見上げる事は出来ないでいたが、ヴァイスがどんな顔をしているかの想像は簡単だった。
「では、自分もマテウスと呼んでいただけると嬉しいです。」
「む、そう…だな。」
「では……マテウス。」
私が今まで呼んだ事ない彼の名を口にするには少し時間がかかってしまった。

１話序章
２０１８．０４．０６．

#2

「ターニャは何が食べたいですか？」
「うむ、クレープだな。」
名を呼ばれるのは慣れていなくてこそばゆいものだ。
いいや慣れねばなるまい。
そう、今はクレープだ。
原宿を知らなくとも、外してはならぬ鉄板アイテム。これは何としても食さねばなるまい。
甘い物が好きなヴァ…マテウスもきっと喜ぶはずだ。
私とマテウスは恥ずかしながらも所謂『恋人繋ぎ』にチャレンジをしてみたのだ。
しかし、私の手が小さすぎる上にこの身長差である。出来上がったそれが、正しい繋ぎ方なのかもよく分からなかった。とてもアンバランスで歩きにくく、結局はマテウスが私の手を掴むような形になったのだ。
これでは彼が私を引率する保護者の様になってる気もするが、これで妥協するしかなかった。まあいい、どんな繋ぎ方でも彼は嬉しそうにしているのだから。
祖国では日常が戦争で、私達はそこで戦う魔導師。
恋人同士となってから、体の関係はあってもまともにデートなどした記憶は無かった。
そう、今日は私も相当に浮かれているようでなのである。
……
「しかし、まずはその服装……。」
「はぁ!?」
「いえ！すみません！お似合いです！」
私の口からは決して彼の言葉への反論の声が出たのではない。
マテウスは私を怒らせたのかとあたふたしているのたが、決してそんな事は無い。

ただ単に私の頭の中はクレープの事でいっぱいだったのだ。
服か、そうか…。忘れていた。私の軍服姿は確かに何とかせねばならない。先程の様な事は二度と御免だ。軍服姿を写真に撮られるなども他国での規律上、良い事でも無い。うん。
「いや、マテウス。服のことはそう、分かっている。」
そう返事をしたものの、困った……。
軍隊生活しか知らない私は、確かに肉体の性別は女だ。しかし、女物の服の事など分からない。そうまったく。ましてやこの国の服など一体どうしたら……。
「マテウス、どうしたら良いと思うか?」肝心のマテウスは顔を複雑な表情に変えながら、
「ターニャはなんでもお似合いかと……。」と言ったきり黙ってしまっていた。
頼りにしていたのに……。
仕方ない。まずは適当に店に入ってみるしかない。
通りを見渡しながら歩いていれば、同じ看板がいくつも目に付いた。人気の店なのだろう。そうならきっと無難な物が見つかるかもしれない。
意気込みつつ、とりあえず入店はしてみたものの、ここからどうするかである。私と見た目だけが同年齢に近い者達がせっせと黄色い声をあげながら選んでいるのを横目に、私もマテウスもその種類の多さに唸っているだけであった。
呆然と2人で立ち尽くしていた。店員は忙しく右往左往していて、尋ねようにもそんな隙も無い。
いかん、このままではクレープがいつまで経っても食べられないではないか。何か参考になるものはと目と顔をきょろきょろと右往左往させて、店に飾られていたマネキンに私は目を光らせた。こいつは何とか私が着れそうな格好をしている。……気がする。
意識が飛んでいる男の服の端を軽く引っ張りながら、
「マテウス。ああいったのはどうだろうか」ビクッと反応した後、私が指差すマネキンに顔を動かして、まじまじと見つめた。

少し間を置いてから、彼からは「良いと思います。」と返ってきた。無表情にのまま意識が飛んでいた彼はほっとした顔になっていた。やれやれ。良かった。現実に帰ってきた。

ニットに短いめのスカート。流石に足を出すのは慣れていないのでタイツを履いた。

試着の済んだ私を、店員とマテウスは褒めちぎっていた。私はうんざりだったが、まぁいい、これなら問題はなかろう。そのまま服はまとめて購入する事にして着ていた軍服はまとめて貰った。

よし！準備ができた所でようやく甘い物と行こうではないか。これぱかりは楽しみで仕方ないのだ。

小さい交差点には数件の似たような店があった。どの店も行列でそれをみたマテウスは気を利かせたつもりだろうが、自分だけ並んで買ってくる。という言葉を私は無視して一緒に列へ潜り込んだ。

仕方ないと笑うマテウス。

「ターニャは何がいいですか？」と２人で決めながら長い列を並ぶのもまたいいものだ。

……

ターニャのお勧めのクレープという何とも魅惑的なスイーツを２人で食べながら、ぶらぶらしていると、大きな公園へたどり着いた。

とても甘くこの素晴らしい食べ物を自分はじっくりと味わいたい。

「少し休みましょう」とターニャを誘いベンチに座った。

薄い生地にクリームや生のフルーツ。そして上にかかったチョコレートソース。

甘味好きな自分には堪らなく、歩きながらも随分と食べてしまった。

こんな物は帝国では滅多に食べられない。

残りのクレープを食べ終わる頃には彼女の顔はあちこちクリームで汚れてしまっていて、親指でそれを拭き取ろうとする。大人しくはしていたが不満そうに自分を睨め付けていた。子供扱いするなと怒っている姿が年相応に可愛らしかった。

待ち合わせの効果か、彼女の初めて見る私服姿の所為だろうか。今

日はまるで普通の男女のデートの様だった。自分は兎にも角にもこんな風に過ごせるのが嬉しくて堪らない。夢にまで見た光景は傾いてきた太陽が
彼女を紅く染めている。
仕事とは違う顔は2人きりでいてもなかなか見せたがらない彼女。なんだかこの国に入国してからは自分が彼女に感じているピリピリとした警戒感も薄らいでいるかにも見えた。
「クリーム。とれましたよ。」
「うむ、そうか。」
仕事中は自分や部下達に一から十まで事細やかに指導をしてくれる彼女だが、2人の時は意外と交わす言葉は意外と少ない。
今日はかなり多い方で、楽しんでくれたのだと勝手に思っていた。
「この国は人が多いですね。活気もある」
「そうだな。」
更に盛り上げ様と何気無い会話のつもりなのに、何故かムスッとして答える彼女を理解する事は出来なかった。
…
公園の木々に咲く花がとても美しいと言うと、「桜」という花だと教えてくれた。
彼女の博識にはいつも自分は舌を巻いてしまう。
風が吹き花が散っていた。
彼女の髪にそのピンク色の花が一房落ちるとそれを取り除く為に自分は金の髪に手を伸ばした。
「マテウス。どうした?」
上目遣いの彼女と自分の目線がすれ違う。
その碧い、碧い瞳に見つめられていた。
「花が…その、髪に…。」
自分は何気なくその花を彼女の手に乗せた。
「ん……」
花を見つめるその碧い瞳に先程まではなかった影がそこにはあった。

「ターニャ、先程からどうかされましたか。」
「なんでもない」
俯いた彼女は何も答えてはくれなかった。
自分は握ったその小さい手に花を載せると彼女はそれを暫く見つめていた。
……
「マテウス、今日はありがとう。」
再び起こした彼女のその顔は微笑んでいて、夕陽に赤くなった瞳もまた美しかった。
「いいえ。楽しんでいただけたのならそれで」
滅多に見られない優しい笑顔。
自然と唇は彼女のそれと重なっていた。
２０１８．０４．０９．
２章